

4. 寄稿:故郷との新たな出会い (アーティスト・クリエイター 丸美由紀)

私の故郷の五島列島福江島は、長崎県の西方に置する離島で、18歳まで住んでいた。以前はよく帰省していたが、両親が離婚し母が不在になってからは行く機会が無くなった。そうした変化から、「故郷」とは生まれ育った場所だけでなく、「母の存在」そのものが故郷なのだと実感した。



高浜海水浴場

地元や行政の方々には、父が生前に大変お世話になった。子供が小学生になり、少し時間に余裕が出来始めた頃に、「地元への恩返し」を考えるようになった。当時、SNSで古代史研究家達が五島について研究しているものを見かけた。私は以前から、五島はインスピレーションを受ける神秘的な場所であると感じていた。ので、「もしかして、歴史を紐解くと何か面白いものが出てくるかもしれない」と思った。

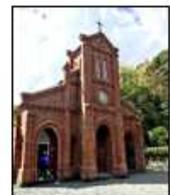


五島列島
歴史ミステリー

そこで早速、2017年の9月に、SNS上に「五島列島歴史ミステリー」というグループサイトを立ち上げた。

<https://www.facebook.com/groups/mystry510/about>

FACEBOOK(以下FB)のグループサイトは、あるテーマに対して関心を持つ不特定多数の人々が集まり、情報を寄せてくれるので、何かを調査したり研究する際の情報収集に役立つ。このSNSの特性を活かし、五島の古代史情報を集め、新たな観光資源や観光ツアーを創出するという、これまでに無い新しいプロジェクトを開始した。



堂崎天主堂

五島列島の古代史研究に関しては、古代史研究家の籠谷道明先生や、五島出身の医師の五島高資先生による長年の研究内容と、今は亡き松野尾辰五郎氏の著書「日本国家の起源—五島列島に実在していた高天原」の内容をベースにし、ネット上に集まった情報を加えて仮説を立てた。そして、情報収集開始から2年後に、サイトに集まった情報をレポート化し、五島市にプロジェクト概要の提示と、支援の要請を行った。



弘法大使空海像

情報をまとめていくと、いくつかのキーワードが浮き彫りになった。失われたユダヤ十支族、ヘブライ、空海、倭寇、平家(=五島家)、キリシタンなどだ。これらは共通要素で繋がっていると直感した。

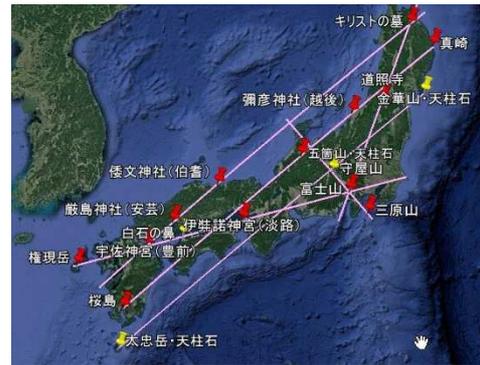
〈五島列島 歴史ミステリー概要〉

世界各地の古代遺跡、ピラミッド山、磐座、一宮は、全て12000年前の極点であるハドソン湾極の緯度・経度に基づき位置決定されている。12000年前に極移動があり、それ以前はハドソン湾に北極があった。6本の地球周回レイラインで結ばれ、そのうち2本が日本を通過し、鹿島神宮と伊勢内宮を位置決定している。



写真提供:籠谷道明

全世界のレイラインの中心は「ハドソン湾極一キリストの墓ー富士山山頂ライン」である。その一部が五島のピラミッド山や沖ノ神島神社の王位石(巨大な磐座)を結んでおり、全世界のレイラインや聖地とリンクしている。



写真提供: 籠谷道明

兵庫県の淡路島で発見された、イスラエル「失われた十支族」の遺跡に関心が寄せられているが、紀元前660年に淡路島に上陸したユダの預言者イザヤとイスラエルの民は、その前に九州の西側の島々を制圧した。イザヤ集団はレイラインを形成しながら東北まで移動するが、五島にもレイラインが形成されている。(古代史研究家・籠谷道明氏の説)



淡路島で発見されたイスラエル十支族の遺跡



野崎島にある沖ノ島神社裏に設置される巨大磐座「王位石」



松野尾辰五郎氏の著書

また、『古事記・神代篇』に出てくる沢山の神名が五島にある多くの地名と極めてよく似ていることなどから、五島列島が「古事記」に出てくる高天原であり、神代の物語は五島が舞台であったという説もある。

本プロジェクトは「五島列島 歴史ミステリー」の情報収集と解明を進め、五島に潜む遺跡や、歴史、特異な文化や風習などをコンテンツ化(観光資源・観光名所化)することを目指している。発足から3年経ち、600人が参加している。五島を訪れたことの無い島外の人も多いが、メンバー同士の交流も進み、今では「アットホームなコミュニティの場」として発展している。

最近では、私も定期的に五島を訪れて、現地調査をしたり、地元のお店や観光地取材し、「五島の魅力」のPRに努めている。古代史情報、研究会メンバー、地元住民、地元産業、観光情報、行政イベントなどをコラボさせ、観光や産業の振興を高めていくことと、移住者が増える中、住民同士のコミュニティも支援している。



地元の皆さんとの交流会

私自身、この活動を通して故郷への関心が深まり、五島の素晴らしさを再認識させられた。コロナ禍で都会の生活での閉塞感が高まる中、地方における人と人との温かい繋がりがや相互扶助、自然環境がもたらす四季折々の風情など、今後益々見直されていくのではないだろうか。